

天安門事件で出現した偽旗工作疑惑の一考察

メタデータ	言語: ja 出版者: 武蔵野大学政治経済研究所 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 青延 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000159

天安門事件で出現した 偽旗工作疑惑の一考察

加藤 青 延

1. はじめに

1989年6月、中国で学生・市民による民主化運動が、人民解放軍によって武力制圧された天安門事件では、その後30年間あまりの期間を経て明るみに出てきた様々な情報や現場映像によって、発生当時、日本をはじめ海外で報じられ、幅広く信じられてきた内容の中に、実際には正反対の解釈をするほうが妥当であったと考察され得る事象がいくつも出てきた。

筆者は、事件発生当時、NHKの海外特派員として北京に居合わせ、至近距離から事件を目の当たりにする立場にあったことから、その後も長期にわたり同事件に関する情報を収集し、事件当時には把握できなかった様々な事象の真相を探ることを自身のライフワークとしてきたことから、これまでも、そのいくつかを論文や放送番組の中でそれを世に示してきた。2020年2月29日発行の『武蔵野大学政治経済研究所年報 第19号』に掲載された拙文「天安門事件 — 30年後に浮かび上がる真相と謀略 —」でも、それまでに明らかになった事実を記させていただいた。

本論文も、その一環として、その後新たに発見した事実に焦点を当てるもので、とりわけ中国当局による巧みな偽旗工作によって、事件当時、その事実関係が誤って伝えられたと疑われる問題について、問題提起をするものである。

具体的には、天安門事件の象徴としてたびたび取り上げられてきた、戦車の前に素手で立ちふさがり行く手を止めた「民主化運動の闘士」と

英雄視されてきた「戦車男（タンクマン）」をめぐる疑惑や、多く装甲車や兵員輸送トラックが、火炎瓶で武装した民主化を求める人たちによって破壊されたとされる事象について、武力制圧を正当化しようとする当局の演出、つまり偽旗工作であった可能性があることを記したい。

2. 「戦車男」が戦車の前進を妨害したことへの疑念

「戦車男」に対する疑惑については、拙著『目撃 天安門事件』⁽¹⁾の中で、二年前までに判明した事実を記したが、その後の調査で、さらなる事実が判明した。結論から先に記すと、戦車男が、前進する戦車部隊の列の前に立ちふさがったのではなく、道路の中心に飛び出した「戦車男」の方に向かって戦車部隊の方が車線変更をしながら近づいてゆき、結果として鉢合わせする形になったことがほぼ突き止められたということである。言い換えれば、「戦車男」が戦車部隊の前進を妨害したのではなく、戦車部隊の方がわざわざ「戦車男」に妨害されに行ったと推定されるのである。

(1) 「戦車男の妨害事件」とこれまでに浮かび上がった疑問

ここではまず、これまで「戦車男」の事件の概要と、世界で広く信じられてきたことを拙著『目撃 天安門事件』の要約をもとに簡単に記しておく。

これまで広く信じられてきた「戦車男」の名場面とは次のように要約される。

時はまさに天安門事件の真ただ中。民主化運動を武力で制圧するため天安門広場に出動した人民解放軍の戦車部隊の列の前に、一人の勇敢な若い男が飛び出した。彼は大胆にも戦車の前に立ちふさがり、仁王立ちになってその前進を拒んだ。(写真1)⁽²⁾すると戦車の操縦士がハンドルを切って進む方向を少し変え彼の脇をすり抜けようとした。だが、その男も果敢に横移動して方向を変えた戦車の前に立ちふさがる。戦車が今度は逆方向に舵を切り、逆サイドから男を避けて進もうとするが、男もそれと合わせて逆方向に横移動し、再び戦車の行く手を阻んだというものだ。そして彼こそが、素手で戦車に挑んだ勇敢な民主化運動の戦士だったと称えられてきた。



写真1 戦車男

天安門事件を報じるメディア報道では、今なお事件の象徴として「戦車男」の映像や画像がしばしば使われている。そのためか、今では多くの人が、あの映像や画像こそが天安門事件そのものなのだと信じ込むようになった。だがその「勇敢な男の名場面」が使われるたびに、当時、武力鎮圧に関わった当事者たちは、「何もわかっていない」とほくそえんでいる可能性がある。

もし筆者が当時現場でその光景の一部始終を自分の眼で見えていなかった

ら、いとも簡単にその「伝説」を信じ込んでいただろう。だが実際のその不思議な「名場面」をありのまま目にするのができたおかげで、多くの疑いを抱くようになった

現場に居合わせたからこそ断言できる点は、まずあの「名場面」が起きたのは、天安門事件の当日ではなく、その翌日、つまり1989年6月5日に起きたということだ。すでに広場は、人民解放軍の部隊に完全に制圧されていた。「名場面」の舞台も、天安門広場そのものではなく、それよりやや東側の長安街。当時、民主化運動の取材をするため多くの外国メディアが最前線の取材拠点を構えていた北京飯店のすぐそばだった。前日の軍事制圧で広場を締め出された多くの外国報道陣は、北京飯店の長安街沿いのバルコニーにカメラを備え付け、レンズを広場の方に向けて警戒していた。問題の「名場面」は、まさにその報道陣のカメラのファインダーにそのまま写り込む絶好の場所で起きた(図1)⁽³⁾。だからNHK、米国CNN、豪州ABCなどを含む世界の主要メディアの多くがその一部始終をとり逃すことなく完璧に撮影できたのだ。もし、それが「勇ましい民主化運動の闘士」の突発的な決起であれば、事前に予告でもされていない限り、たまたまその場に居合わせたメディアが特ダネとして撮影できることはあり得るとしても、かくも多くの外国メディアが一斉に撮影できることは考えにくい。

当時、北京飯店の一室の最前線拠点で取材をしていた筆者も、その事件を直接黙視できる場所にいた。その時の実際の様子は次のようだった。

天安門広場のすぐそばの長安街で「ウォー」という歓声が起きた。異変に気づいた筆者が滞在していた北京飯店の窓から長安街を見ると、肉眼ではやや遠目に感じられたが、20両近くの戦車部隊の列の前に、一人の男が立ちふさがっていた。あの「戦車男」だった。

後で望遠レンズで撮影された映像を後で確認すると、たった一人でいとも簡単に戦車の縦隊を止めることに成功した男は右手にぶら下げたビニール袋のようなものを少し振り回すようなしぐさをした。すると先頭の戦車

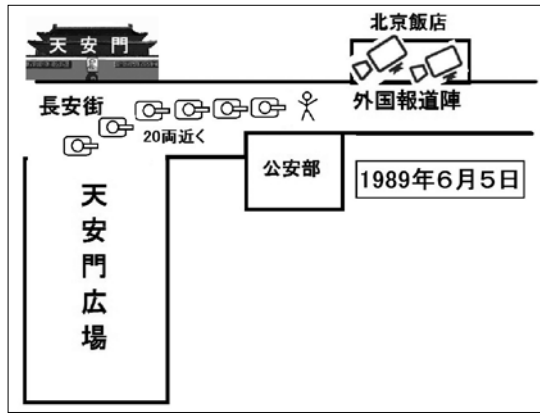


図 1

がそちらの方向に舵を切る。男は直ちに横に移動し、戦車の行く手をさえぎり、そして今度は左手にぶら下げたバッグを少し振り回すようなしぐさをした。するとそれに応じたかのように、今度は戦車が左側に舵を切り返した。戦車男と先頭の戦車の間では、その後も同じようなことが繰り返され、戦車は右へ左へと舵を切り替えし、そのたびに男が戦車の前に立ちふさがるといった形になった。やがて戦車男は、停止している戦車の上によじ登り砲塔の中をのぞき込んだ。さらに横に降りて、戦車の砲塔から顔を出した戦車長と思われる兵士と言葉を交わしたように見えた。やがて戦車がゆっくりと少し前進をすると、男は再び駆け足で戦車の前に立ちふさがりこれを制止する形になった。しかし、しばらくすると「戦車男」は、長安街の両側から一斉に飛び出した私服警官と思われる男たちの手で取り押さえられ、そのまま目の前の公安部（警察庁に相当）の中に連れ込まれるような形で姿を消したのだ。

しかし、この事件が起きた当時から、この「戦車男」と戦車が対峙する光景には不可解な疑問がいくつも浮かんでいた。

まず、厳重な警備が敷かれていた天安門広場の近くにあの戦車男がなぜ

易々と入り込めたのかということ。仲間がいれば一斉に車道に飛び出せただろうが、彼は「単独犯」だった。

しかも男が戦車を止めた場所が公安部の目の前の路上で、当時その近辺には、非常に多くの私服警察官が見張っていたはずだった。もし不審な男がいれば、道路に飛び出した瞬間につかまってしまうような緊迫した状況だった。なぜ私服警官たちは、あの「戦車男」が戦車部隊の前に飛び出してもすぐに取り押さえず、3分20秒間にもわたって戦車の行く手を妨害し続けることを黙認したのだろうか。また「戦車男」はなぜ、両手に大きな袋を垂れ下げ、戦車に合図を送るようなしぐさをしたのか。(写真2)⁽⁴⁾ 「戦車男」は、なぜ当局を批判するような叫び声をあげなかったのか。広場で抵抗した多くの学生や市民が、いつも大声で共産党や政府の批判を口走っていたのとは対照的だった。



写真2 戦車男の妨害

そもそも行く手を阻まれた戦車部隊は天安門広場を制圧した後、広場から撤収する方向に移動していた。もし「戦車男」の行動が、広場に侵入しようとする戦車を食い止めようとしたのであったらまだ納得できる。実際

にはその逆で、宿営に帰ろうと広場をあとにする戦車部隊の列の前に、「戦車男」は、まるで「広場から撤収するな」と言うかのような阻止行動をした形なのだ。

さらに疑問は尽きない。先頭の戦車が前進を阻まれても、後続の20両近くの戦車がお行儀よく一列に連なる必要はなかったはずだ。現場の長安街の道幅は片道4車線という北京の中でもひととき広い場所だった。他の戦車は、先頭車のわきをすり抜けてどんどん前進できたはずだ。たった一人の素手の男が、先頭の戦車を止めたところ、後続する20両近くが数珠つなぎのようになって一斉に止まってしまったことすらおかしいことだった。

以上が、筆者が当時、現場で抱いた疑問であった。

(2) 新たに浮かび上がった映像証拠

筆者はこの「戦車男」を撮影したNHKの映像などを繰り返し検証してきたが、インターネットに出回った映像から、新たな事実をつきとめることができた。それは外国テレビ局の編集前の素材だと考えられる。

当時、筆者も含め「戦車男」を目撃した外国報道機関の多くは、長安街で歓声があがり、「戦車男」が戦車の前に立ちふさがる直前になって異変に気づくことになった。従って、多くの映像や写真は、「戦車男」が戦車の前に立ちふさがる直前から撮影されている。

ところがこの映像は、「戦車男」が長安街に飛び出す前、天安門広場から戦車部隊が撤収しこちらに向かい始めた直後から撮影を開始していた。

つまり「戦車男」の妨害事件が起こるとは予想すらしないまま、たまたま戦車部隊が姿を現したので撮影を始めていたと思われるのである。その映像を見ると、戦車の列は当初、右側通行という中国の交通規則に従って、長安街の中央から右に三列目の第二車線を一列になって前進してきた。(写真3)⁽⁵⁾



写真3 天安門広場を出る戦車部隊

そして、「戦車男」が長安街の中央線付近に飛び出すと、なぜか列の先頭の戦車が少しずつ進行方向を変えて車線を変更しながら、その男の方に近づき始めたのである（写真4、5）^{(6) (7)}



写真4 戦車が戦車男の方に方向転換



写真5 戦車の方向転換

スチール写真で俯瞰を撮影したもの(写真6)⁽⁸⁾からも車線変更の結果はわかるが、静止しているため、この写真だけでは「戦車男」と戦車部隊の動きの相関がわかりにくかった。このためこれまでこの写真は、戦車が先に車線変更をしたところ、その行く手をさえぎるように「戦車男」が横移動して立ちふさがったと解釈されてきたようだ。



写真6 戦車男に近づく戦車部隊

ところが動画の方を見ると「戦車男」が先に中央方向に飛び出し、戦車部隊の方がその男のいる場所へと、車線変更をして近づいて行った様子が確認できるのである。直前の相関関係はNHKなどの他の動画からも確認できた。(写真7)⁽⁹⁾



写真7 戦車男 3両目はまだ別車線

つまり動画を細かく分析すると、「戦車男」が先に車線変更しながら前進する戦車の列の前に飛び出して行く手をさえぎったと考えるのはやや不自然で、むしろ、道路中央に飛び出した「戦車男」の方に、戦車部隊の列の方が車線変更をしながら接近したと考えるほうがまったく自然なのだ。

戦車の方からわざわざ「戦車男」に妨害をされに行ったという構図が見えてくるのである。

これはこの「事件」が、民主化運動の勇士による大胆な抵抗行動と考えるより、中国当局が、これを撮影することになる多くの西側報道機関を通じて、「中国人民解放軍は戦車で人をひくような残酷なことはしない」ということを世界に発信させようとした「やらせ」、つまり偽旗工作であろうことをさらに裏付ける新証拠だといえるだろう。

(3) 江沢民総書記（当時）の発言の真意

謎めく「戦車男」について、2000年9月、江沢民総書記は米国 CBS テレビのインタビューの中で次のように答えていた。⁽¹⁰⁾

「(戦車男)は逮捕されていません。ただ、いま彼がどこにいるのか私にはわかりません」

当時、中国共産党の頂点に立っていた江沢民総書記にとって、「戦車男」の存在までいちいち把握してられるはずがないことは後半の「いま彼がどこにいるのかわからない」という返答で十分理解できる。しかしそれならどうして、「逮捕されていない」と断言できたのであろうか。

もし「戦車男」が民主化運動の闘士だったとするなら、戦車の走行を妨害した事実だけでも、十分逮捕に値する罪に問われても仕方がない状況だった。仮に戦車の走行妨害だけでは逮捕されないとしても、かくも大胆な行動をとった人物であるなら、その前にも多くの「余罪」がある可能性もあるし、今後、別の「過激な行動」をとりかねない危うさもある。したがって、その後も厳重な監視下におかれ、何か不審な行動をとればいつ逮捕されてもおかしくない状態であったと推定される。

しかし江沢民総書記は、「過激な人物」かもしれない男が、今どこにいるのかわからないのに、「逮捕されていない」と即答した。これはどうしてそう答えられるのかその根拠がきわめて不可解だ。

ところが、もし「戦車男」が当局側の人物で、戦車部隊と一緒に「一芝居打った」というのであれば、江総書記の発言は、根拠も含め、容易に理解できるのである。

つまり、当局側の人物であるし、当局側の意向に沿って、忠実に「戦車の走行妨害という任務」を遂行をしたわけであるから、絶対逮捕されるわけではないのである。軍の最高地位である中央軍事委員会主席の地位にいた江総書記が、その「一芝居」の裏事情を承知していれば、「彼は逮捕されていない」と即答できるのである。ただそのような任務を遂行した人物は、当局の中では、比較的末端の部署に所属していたと考えられるため、

いまどうしているか、最高指導者の江沢民総書記が「知らない」ことも至極当然のことだといえる。

3. 天安門事件の当日だけ行われた集団火炎瓶襲撃の謎

人民解放軍が、民主化を求める学生や市民の武力制圧に乗り出した6月3日深夜から4日早朝にかけて、北京市内各地で軍の装甲車や兵員輸送のトラックが火炎瓶攻撃を受け、大量に消失する事態が発生した。

しかし、現地で学生や市民の民主化運動を密着取材していた筆者は、それ以前に学生や市民が火炎瓶を準備したという話は一切耳にしなかった。学生運動のリーダーたちは、非暴力の抵抗を訴えており、事件当時はハンガーストライキを主軸の闘争としていた。

もちろん完全に統制が取れていたわけではなく、一部の学生は軍や武装警察に対して、投石をしたり、空瓶を投げたりする暴力的な行動もなかったわけではない。空瓶を投げるといふ行為は、小瓶という中国語の発音と当時の最高実力者、鄧小平氏の小平とが、同じ発音であることから、小瓶を投げて壊すことが、鄧小平氏を打ちのめすという意味になるというごろ合わせでやっていたようだ。

ところが天安門事件の当日には、北京を横切る長安街や市の南部地域など、広範囲にわたって火炎瓶が多く「群衆」によって使用されたのである。学生や市民が、いつから組織的に火炎瓶の準備をしていたのか、火炎瓶を投げた人たちが、本当に民主化運動を行っていた人たちなのかはいまだに不明であるが、彼らの主義主張を考えれば、学生・市民の仕業だと考えることにはかなり違和感が残る。中国当局の発表に基づけば、火炎瓶を投げたのは「一部の暴徒」であり、天安門広場や大学のキャンパスで、民主化を訴えハンガーストライキなど平和的な抗議活動をしていた大多数の学生・市民とは、全く異なる武闘派の「暴徒集団」が組織的に存在していたことになるのだが、当時の状況からそれは考えにくいことだった。

そして、もう一つ謎として解明が待たれるのは、火炎瓶攻撃を受けた軍の車両の中に、ほとんど無抵抗の状態、まったく回避行動をした形跡がないまま焼かれてしまったものが散見されたことである。きちんと縦隊列を維持したまま炎上する装甲車の一団もあった（写真8）⁽¹¹⁾



写真8 燃える装甲車

事件当時、これらの装甲車の中には、小銃で武装した兵士が乗り込んでいたはずで、かくも整然と列をなし、無抵抗な形であっさりと暴徒が投げる火炎瓶の餌食になることは、ふつうは考えにくいのではないか。

損害を受けた装甲車両やトラックなどが、廃棄寸前の旧式なものが多かったことも、最初から、火炎瓶攻撃で焼失することを想定していた可能性すら疑わせるものである。

実際、筆者が事件の翌年、北京郊外の某集団軍の駐屯地を訪問した際、その部隊の空き地にはすでに真新しいトラックが数十両ずらりと並び、天安門事件で焼かれたものと同じタイプの旧式トラックは全て廃棄処分になったと聞いた。

天安門事件では、軍の発砲で学生や市民に多くの死傷者が出たが、当局がそのような強硬手段に出た言いわけとして、暴徒が軍の装甲車やトラック

を火炎瓶で襲撃し、大きな被害を受けたからだという口実にもなり得る。市内各地の火炎瓶攻撃の中には、廃棄寸前の旧式車両を使って仕組まれたものがあるのではないかと疑える余地が残っているとしよう。

4. 結び

天安門事件を巡っては2020年2月29日発行の武蔵野大学政治経済研究所年報 第19号に、それまでに浮かび上がった真相を列記したが、広域にわたる大規模な事件だったこともあって、依然として謎に包まれている点が少ない。本論では、第19号以降に筆者が新たに分析し、突き止めた「戦車男」と戦車部隊の関係や、天安門事件当日だけに出現した、暴徒による火炎瓶攻撃の謎について、問題提起をする形になった。事件からすでに34年を経ているものの、中国では今なおこの事件に対する言論が厳しく統制され、いまだに判明できない点も少なくない。

当時、現地で事件を直接体験した筆者としては、そうした謎を少しでも多く解明することを心がけてきたが、研究分析に必要な中国内部の資料が封印され、公開される新たな手がかりは年々減少傾向にあり、真相解明に限界を感じ始めている。ただ、本論で示した「戦車男」と戦車部隊の関係については、「戦車男」の正体については依然として不明ながら、これまでは、走行する戦車部隊の車列の前に男が立ちふさがったと考えられてきたことが、実は、まったくの逆で、道路の中央に飛び出した「戦車男」の方に、戦車部隊の方が舵を切って近づいてゆき、あえて進路を妨害される構図を形成した可能性が濃厚であることが、当時撮影された映像分析によって、ほぼ立証できたと判断し、ここに火炎瓶攻撃の謎と合わせてご紹介させていただいた。今後の天安門事件研究にわずかでも役立つことになれば幸いである。

注釈

- (1) 『目撃 天安門事件 歴史的民主化運動の真相』加藤青延著 PHP エディターズグループ
- (2) NHK 撮影映像の一コマ
- (3) 筆者作画
- (4) NHK 撮影映像をベースに筆者作画
- (5) YouTube 映像をベースに筆者作画
<https://www.youtube.com/watch?v=-AvbtJdZjq4>
- (6) YouTube 映像をベースに筆者作画
- (7) YouTube 映像をベースに筆者作画
- (8) <https://www.voachinese.com/a/distorted-ccp-history-part-1-Tiananmen-massacre/5908517.html>
- (9) NHK 撮影映像をベースに筆者作画
- (10) 2000年9月3日 米CBS放送
- (11) インターネットより
<https://strategy.style/archives/china-pla-type-63-wza-531-apc>

主な参考文献

- 『1989北京制止動乱平息反革命暴乱紀事』中共北京市委弁公庁編 北京日報出版社
『北京 風波真相和実質』中央党校党的基本路線課題研究組編 大地出版社
『北京学生運動50日』中国時報記者グループ編 時報文化出版
『中国「六四」真相 上・下冊』張良 明鏡出版社
『八九中国民運資料冊』香港中文大學編 中文大學学生会出版
『チャイナ・クライシス重要文献 第1巻～第3巻』矢吹晋編訳 蒼蒼社